

教育訓練省
フオンドン大学
外国語学部日本語科



報告書 日本文での七夕祭り

学生 : Đồng Thị Như Ngọc
学生番号 : 518705724
クラス : 518705B4
指導教官 : Đỗ Phương Quế Hoa

ハノイ、2022 年 01 月

目次

目次	1
図のリスト	3
表のリスト	3
はじめに	4
第一章七夕祭り紹介	5
1.1 七夕祭り概略.....	5
1.2 七夕祭りとは.....	5
1.3 七夕の名前意味.....	5
1.4 七夕祭り起源.....	6
1.5 七夕伝説.....	6
1.5.1 中国.....	6
1.5.2 日本.....	8
第二章日本の七夕祭り	9
2.1 七夕祭りの活動.....	9
2.2 七夕飾りの意味.....	10
2.3 五色の短冊の意味.....	11
2.4 七夕に食べる料理.....	12
2.5 日本三大七夕祭り.....	13
2.5.1 宮城県仙台市仙台七夕まつり	13
2.5.2 神奈川県平塚市湘南ひらつか七夕まつり	14
2.5.3 愛知県安城市安城七夕まつり	15
第三章七夕祭り影響	16
3.1 過去と現在の違い.....	16
3.1.1 過去.....	16
3.1.2 現在.....	17
3.2 七夕祭り日本、ベトナム、中国の違い.....	18
3.2.1 中国で七夕祭り	18
3.2.2 ベトナムで七夕祭り	18

3.2.3 日本で七夕祭り	19
3.3 コロナ社会に七夕祭りの変化.....	22
おわりに	24
参考文献	25

図のリスト

図 1 星ベガとアルタイル	5
図 2 孝謙天皇	6
図 3 牛郎織女	7
図 4 七夕の笹飾り	9
図 5 七夕の笹飾りライトアップ	10
図 6 折り紙で作る七夕飾り	10
図 7 小麦粉で索餅	12
図 8 冷そうめん	12
図 9 植物油で揚げのかりんとう	13
図 10 祈りの吹流し	14
図 11 神奈川県に吹き流し	15
図 12 町で七夕踊り	15

表のリスト

表 1 日本で七夕祭りを紹介する	20
------------------------	----

はじめに

日本は文化を注意深く吸収し、他国から文化を選び出し、独自の文化に変えてきた国である。また、お祭りは日本人が他国から吸収し学ぶもののひとつであり、日本人はお祭りが大好きであり、お祭りは彼らの生活の不可欠な部分である。日本では、地域ごと、地域ごとに、その地域特有のお祭りがある。この論文は、日本全国で大規模に開催されている最大の祭りの1つである日本の七夕祭りの研究に焦点を当てている。七夕まつりを学ぶことで、日本の伝統的なお祭り全般の概要を知ることができ、特に七夕まつりについてある程度理解している。

本稿は、3部分の構成であり、具体的な内容は次の通りである。第1節では、七夕祭り、歴史、由来、七夕という名前の意味を紹介する。第2節では、休日の活動、いくつかの典型的なお祭りについての一般的な内容である。第3節では、日本語、中国語、ベトナム語の七夕の違いについて説明する。また、過去と現在の七夕の違い、そして最後に、コロナ社会に七夕祭り変化を研究する。

七夕まつりなどの日本のお祭りを研究することで、日本の世界観をより深く理解することができ、日本に住むベトナム人があなたの国のコミュニティに溶け込み、日本企業で働くベトナム人が日本語をよりよく理解できるようになる。

第一章七夕祭り紹介

1.1 七夕祭り概略

七夕まつりは、日本と中国の習慣や伝統が融合した文化である歴史的なお祭りの一種である。七夕は全国で開催される5つのお祭りで構成されている。この休日、人々はそれが実現することを期待して彼らの願いを書き留めることがよくある。

1.2 七夕祭りとは

星祭りとしても知られる七夕まつりは、中国の七夕に端を発した日本のお祭りである。七夕まつりは、織姫と彦星の出会いをもとに開催されている。織姫はベガの星形成を表し、彦星は天の川で引き離されたアルタイルを表す。最初の2つの星の交差点は、後に星祭りとしても知られる七夕祭りを作成した伝説を生み出す。

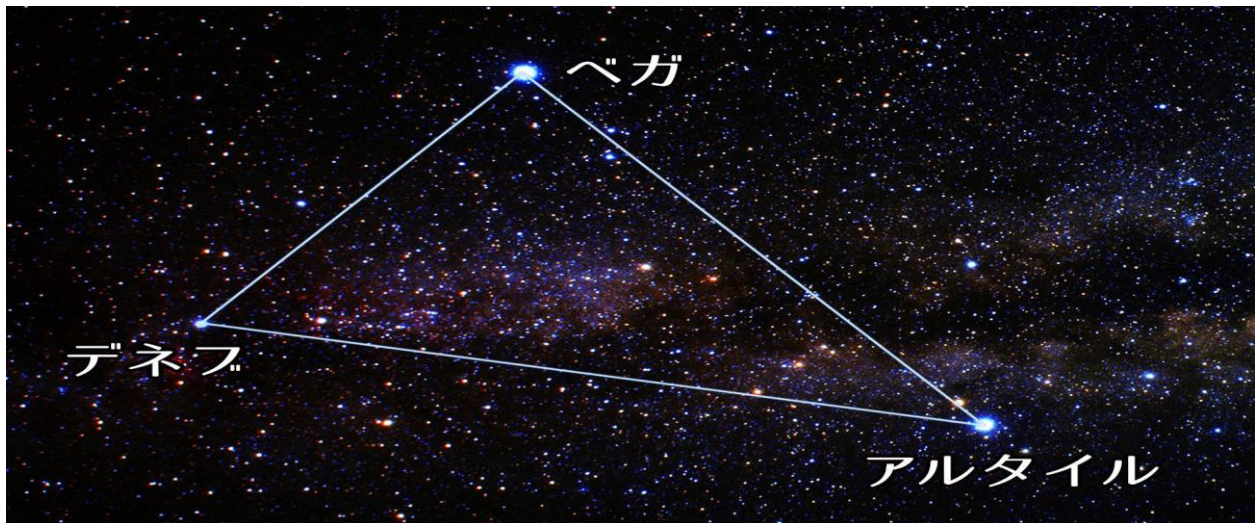


図1 星ベガとアルタイル

1.3 七夕の名前意味

七夕という名前は、日本語の読み、漢字の漢字に由来している。七夕、以前は七夕と呼ばれていた。神道の浄化の儀式は、巫女が七夕（棚機またはバンマイ）と呼ばれる織機に特別な布を織り、保護のために神に捧げられたのと同じ頃に存在したと考えられている。秋。次第に、この儀式は喜光伝と合体して七夕になった。七夕と呼ばれる七夕の名前は、元々は起源は異なるが、同じお祭りになった。

1.4 七夕祭り起源



図2 孝謙天皇

この祭りは、755年に光研天皇によって日本に紹介され他。七夕の別名である才能の祭り（乞巧奠）に端を発し、中国で開催され、日本にも移りた。平安時代から京都御所。七夕は江戸時代の初めに一般の人々の間で広く人気を博し、盆祭りと混ざり始め、盆の伝統（その後7月15日に盆が開催されたため）が徐々に現代の七夕に発展した。

日本の七夕の起源は、乞巧奠だけではない。日本では、毎年7月7日に「棚機女(タナバタツメ)」という巫女が水辺で神の降臨を待つという民間信仰とむすびついた行事がある。日本の七夕は、この「タナバタツメ」と、中国の乞巧奠とが合体したものだという説が有力である。ちなみに乞巧奠は、平安時代の貴族たちが中国の風習を真似て導入していたようで、その後乞巧奠が民間に流れていき、次第に「タナバタツメ」と合わさっていったであろうか。民俗調査などでは、七夕がお盆(旧7月15日)を迎えるための準備としての意味をもつ(七夕盆)場合や、農業の豊作を願う意味で行う場合など、様々な意味合いを持っている場合がある。これは後世になって民間のいろんな行事と混ざり合っていて、出来上がったものだと思う。現在、日本は太陽暦に切り替えているため、お盆を祝う時期は地域によって異なり、そのほとんどは太陰暦の元の日付に近い太陽暦に従って8月15日に行われ、七夕と盆の時間は別である。

1.5 七夕伝説

七夕まつりは、中国の牽牛織女の伝説に基づいて始まり、日本へは星まつりとして伝えられ他。はじめ宮廷貴族を中心とする都の生活のうちに受け継がれ、書道の上達や恋愛の成就を祈る風習となった。

1.5.1 中国

「牛郎織女」の物語の中で有名なものに京劇などで演じられる『天河配』がある。天の川の東岸に暮らした織女は、人と神の恋情を禁じた天の女帝・王母娘娘（おうぼにゃんにゃん）の外孫女。朝から晩まで「天梭」を使い、「天衣」と呼ばれた雲錦を織っていた。ある日、姉妹たち（七仙女と同一視された）と共に人間界の河（碧蓮池）の辺に

降り来たりて水浴をした。人間界の青年である牽牛郎が飼い牛（金牛星の化身）の助言によって、河の辺で水浴びをしている天女の紫色の羽衣（あるいは桃色の羽衣）を盗んだ（一説には織女を見かけて一目惚れした牽牛郎は、彼女の羽衣を盗んで隠された）。羽衣を失った織女が天界へ帰れないので地上に残って、最終的には牽牛郎の求婚を受け入れ、一人の男の子と一人の女の子を生んで、男が耕し、女が機織りをする幸福生活を送っていた。



図3 牛郎織女

しかし、幸福生活は長く続かず、天上から消え失せた織女を探していた王母娘娘は、織女と人間の男の結婚を知って怒り、「天兵」（天にある軍隊）を遣わして、天界の戒律に違反した織女を捕らえて天に連れ帰る。牽牛郎が天に昇る道もなく、彼の飼い牛より「私が死んだ後、私の皮で靴を作って、その靴を履けば天界に上ることができる」だと言われている。その後、飼い牛が死んである。牽牛郎は飼い牛の言うとおりにして、牛の皮で作った靴を履き、子供たちを連れて天界に上り織女を探している。これに怒った王母娘娘は、牽牛郎が自らの外孫婿であることを認めなかった。

容姿を隠した七人の天女のうちで織女を選んで会うことを許した条件を出した。牽牛郎が王母娘娘からの非難に困らせた。しかし子供たちは母親を認めた。王母娘娘は、織女を再び人間界に戻すことに反対し、織女を天牢に閉じ込めるよう部下に命じた。織女を追いかけていた牽牛郎が、織女のところに到着しようとした際、残忍な王母娘娘は突然頭から金簪を抜いて一振りすると、天の川で輝く大波を引き起こし、牽牛郎と織女は

兩岸に分け隔てられている。のちに王母娘娘によって毎年七月七日だけカササギが橋を架けて、牽牛郎に橋を渡って織女に会うことが許されていた。それは、古代封建制における恋愛と結婚の不自由を反映している。

1.5.2 日本

天帝の娘である織姫は、機を織るのが仕事である。しかし仕事ばかりする織姫を心配した天帝は、織姫を天の川の向かい岸にいる彦星と引き合わせた。すると二人は恋に夢中になって仕事を全くしなくなってしまった。それをみた天帝は怒り、二人を天の川の兩岸に引き離してしまった。

二人の様子を哀れに思った天帝は、一年に一度、7月7日の夜にだけ会うことを許した。しかし、7月7日に雨が降ると天の川の水が増水してわたることができないので、カササギが二人の橋渡しをする。

第二章日本の七夕祭り

2.1 七夕祭りの活動

七夕とは、織姫さまと彦星さまが天の川を渡って、1年に1度だけ出会える7月7日の夜のこと。短冊に願い事を書いて、笹竹に飾り付ける。「雨が降ると天の川が渡れない」ともいわれて、てるてる坊主をつるした人も多いのでは。



図4 七夕の笹飾り

ではまず、セタが現在どのようにお祝いされているのか、まず、セタのメインとなる笹飾り。笹に飾るものには色々な種類があつて、それぞれ意味を持っている。たとえば、「商売繁盛を願う」、「巾着」長寿を願う「折鶴」、織姫の織りを象徴する「吹流し」、「豊漁を願う鯛飾り」。この笹飾りは七夕の時期に色々なところでみることができる。もちろん、セタのお祭りでもである。多くの地域で七夕のお祭りが催されている。有名なものには「仙台七夕まつり」がある。お祭りでは多くの人が商店街に集まる。商店街には笹飾りや、屋台、地域によっては音楽が演奏されたり、盆踊りが行われる。人気の屋台のメニューといえばたこ焼きや焼きそば。冷たいビールなどがある。また、短冊と呼ばれる紙にお願い事を書いて飾るのも七夕で広く行なわれていることのひとつだ。お願い事を書いたら笹飾りに飾り。「織姫と彦星が会えるように」、「家族みんなが健康であるように。」、「お金持ちになりたい」などがよくある願い事である。その後、竹や装飾品は通常、川に置かれるか、祭りの後、真夜中または翌日頃に燃やされる。



図5 七夕の笹飾りライトアップ

2.2 七夕飾りの意味

色とりどりの短冊や、いろんな形の飾りを笹竹に吊す七夕飾り。昔は高ければ高いほど星に願いが届くと考えられ、屋根の上まで高くかかっていたようだ。折り紙で作る七夕飾りにはいくつかの種類があり、「七つ飾り」と呼ばれている。それぞれにこんな意味が込められている。



図6 折り紙で作る七夕飾り

- 吹き流し

機織りやお裁縫の上達を願う飾りである。かつての宮中儀式で、五色の糸を長い針に通してお供えしていたものを、紙で表現したものだ。

- くずかご

清潔、儉約を意味している。七夕飾りを作るときに出た紙くずを入れて飾ることも。

- 網（あみ）飾り

漁業の網（あみ）から生まれた飾りです。大漁を祈願している。

- 折鶴

家内安全や、長寿を願う飾りです。千羽鶴にする場合もある。

- 巾着（きんちやく）

金運の上昇や、貯蓄を願って飾り。財布の場合もある。

- 紙衣（かみこ）

折り紙で作った人形や着物の形のもののこと。裁縫の上達を願うほか、病気や災いの身代わりになってもらうという意味もある。

- 短冊

「五色の短冊」に願い事を書いて飾り。五色とは、赤・黒（紫）・青・白・黄のこと。

2.3 五色の短冊の意味

五色は、古代中国の「五行説」という自然哲学からきている。万物のすべてを構成すると考えられた5つの元素に、それぞれ色を当てはめたものである。

火（炎）＝赤

水＝黒

木（植物）＝青

金（鉱物）＝白

土（大地）＝黄

のちに、青は緑も含むようになり、黒は縁起が悪いとして高貴な色である紫が用いられるようになっていく。

2.4 七夕に食べる料理

- 索餅



図7 小麦粉で索餅

七夕の食べ物といっても、特に思い付かない人も多いのでは。でも、ちゃんとあるのだ。伝統的なものの一つが「索餅（さくべい）」。小麦粉や餅粉をひねって揚げたお菓子で、唐の時代に日本に伝わる。今でも奈良県では「麦縄」と呼ばれ、親しまれている。

- そうめん



図8 冷そうめん

索餅が、だんだんと進化していったものがそうめん。例えば宮城県仙台市では今も、400 年の伝統を持つ「仙台七夕祭り」が行われていて、そうめんが定番の食べ物である。そうめんには色つきのものもあるので、五色の短冊にちなんで「五色そうめん」にすると、七夕らしさが演出できる。

- かりんとう



図9 植物油で揚げのかりんとう

索餅にもっとも近いお菓子が、かりんとうである。かりんとうは唐菓子（とうがし・からくだもの）が原型とも、スペインの南蛮菓子がルーツともいわれている。東北地方のかりんとうはバラエティ豊富。秋田県には短冊形や落ち葉の形のかりんとう、岩手県には渦巻き形のかりんとうがあり、どれも個性のあるおいしさである。

2.5 日本三大七夕祭り

2.5.1 宮城県仙台市仙台七夕まつり

七夕まつりといえば、有名なのが宮城県仙台市で行われる「仙台七夕まつり」である。その歴史は古く、初代仙台藩主・伊達政宗公の時代から続く伝統行事として伝えられ、「七夕まつり」といえばこのお祭りが思い浮かぶ人も多いのではないだろうか。

全国から毎年 200 万人を超える観光客が訪れる、まさに全国随一の七夕まつりである。豪華さを誇る現在の観光七夕の形になったのは、実は昭和に入ってから。もともとは家ごとに行われる、仙台市民の素朴でつつましいお祭りだった。

仙台七夕まつりは近年益々豪華になってきている。竹飾りも新しい趣向を凝らし、時流に合った飾り付けも登場している。しかし仙台七夕は、絢爛豪華な飾り付けばかりが特徴ではない。仙台伝統の七つ飾りがどの竹飾りにも下げられていることや、本物の和紙で作られる手作りの七夕飾りなど、400年間続く仙台七夕の良き伝統が現代にもきちんと守られていること。



図 10 祈りの吹流し

2.5.2 神奈川県平塚市湘南ひらつか七夕まつり

神奈川県平塚市で毎年7月7日を挟んだ前後数日に開催される湘南ひらつか七夕まつりは1951年（昭和26年）から行われているお祭りである。平塚市は戦争中に大空襲にみまわれた場所（1945年7月）で市内の70%にものぼる場所が焼け野原となってしまった。

その後、戦後復興事業をすぐに開始し、商業復興策として第一回目の湘南ひらつか七夕まつりが行われることになった。市内を役2キロにもわたって七夕飾りで装飾してにぎわうお祭りで、装飾や七夕祭りの中で行われるイベントも毎年違った趣向をとり入れることで、現在では湘南ひらつか七夕まつりの期間中に300万人ものひとが集まるお祭りになっている。



図 11 神奈川県に吹き流し

2.5.3 愛知県安城市安城七夕まつり

愛知県安城市で毎年 8 月の第一週の週末の 3 日間に開かれる安城七夕まつりは 1954 年（昭和 29 年）にスタートしたお祭りである。実はこの安城七夕まつりがはじまる 2 年前に安城市は誕生したばかりの新しい市で JR 安城駅周辺の商店街の方々が考案したのが始まる。

「市民発信のまつり」としても有名な七夕祭りで誕生以来参加する人や地域が増え続け現在では日本三大七夕祭りとして知られるようになった。1978 年（昭和 53 年）には「全国郷土祭」に参加し特徴ある竹飾りが披露され、仙台・平塚と並んで日本三大七夕祭りとして広く知れることになった。



図 12 町で七夕踊り

第三章七夕祭り影響

3.1 過去と現在の違い

この祭りは、755年に光研天皇によって日本に紹介され他。毎年、願い事を書いて、それが実現することを祈る行事として開催される。また、当時の祭りでは笹飾りと笹流したり、七夕踊ったり、芋の葉の露で書道したり、梶の葉や短冊に和歌を書いたり、星に小袖を貸したりと、さまざまな活動が行われた。長年にわたり、このお祭りは日本最大の愛の祭りとなり、あなたの願いが叶うことを祈っている。現在、七夕まつりは主に装飾大会に関連している。お祭りでは多くの人が商店街に集まる。商店街には笹飾りや、屋台、地域によっては音楽が演奏されたり、盆踊りが行われる。人気の屋台のメニューといえばたこ焼きや焼きそば。冷たいビールなどがある。また、短冊と呼ばれる紙にお願い事を書いて飾るのも七夕で広く行なわれていることのひとつだ。索餅、そうめん、かりんとうなど他の有名な料理もある。

3.1.1 過去

江戸時代の七夕風習江戸時代になると、七夕はすっかりと庶民の行事として定着した。技芸の上達を願う気持ちはそのままですが、お祭りとしてかなり盛り上がりを見せていたようだ。前述の「銀河草紙」には、さまざまな風習が紹介されている。その一部を紹介する。

- 笹飾りと笹流し

七夕の笹飾りは、江戸後期には既に盛んになっていたようで、「今の世のならいに、七月五日または六日に五色の染紙を色紙短冊の形に切りて、詩歌を書き、長き竹に結び付け、幼童ら市中をささげ歩きて遊戯をなし…」とある。江戸時代は子どもたちが笹を持って、街中を練り歩いたことがわかる。

- 七夕踊り

七夕の夜には「七夕踊り」という踊りの会が催された。これは諸芸を教える師匠の家が主催して行なうもので、「銀河草紙」には「手習いをしゆる家々には、この日門人を迎え、手向けの詩歌を書かしめ、夕べには提灯をともし連ねて、踊りを催ふす」とある。

- 芋の葉の露で書道

七夕の朝は早起きして、芋の葉に付いた露を集めて墨をすって書道をして達筆を願った。この日は硯もよく洗い清め、筆も新しいものを使ったという。芋の葉の露を使う理由は、「銀河草紙」によると「芋の葉における露は、みるみる白金のようにて、いとも清くみゆる」からだそうで、故事などのいわれは無いとしている。

- 梶の葉や短冊に和歌を書く

七夕には、星に捧げる和歌を詠んだり、詩を作ったりする風習もあった。『銀河草紙』には、「短冊色紙書法」として短冊や色紙に詩歌を書く「書き方」の例が絵で示されている。また短冊だけでなく、梶の葉に書く風習もあったと紹介している。

- 星に小袖を貸す

江戸時代には、七夕の日に着物を星にお供えする風習があり、人々は「星に小袖を貸す」と言っている。この風習は「貸し小袖」といい、着物をお供えするとよい着物に恵まれる、などと言われている。

その他、「銀河草紙」には、裁縫いを教える先生が弟子の女性を招いて、模様を描いた紙で小さな男女の衣服を縫って手向ける風習を紹介するほか、貴族たちが和歌の上達を願って歌会を開き、蹴鞠をし、生け花などを行ったことなどを紹介していて、さまざまな風習が繰り広げられていた様子が伺える。

なお、「銀河草紙」の著者である池田東籬(1788～1857)は京都の人で、朝廷の役人として勤めながら、一般向けの本を多く著した作家である。ですので、この本に書かれた風習は、当時の京都で行われていたものではないかと思われる。

3.1.2 現在

今日の七夕まつりは非常に多様で豊かで、以前のように短冊に願い事を書く日ではない。私たちは神殿に行って新しい関係を見つけたり、強い関係を維持したり、愛のライバルを追い払ったりすることを祈ることができる。神社の七夕まつりでは、織姫や彦星の紙人形に心の願いを書いて、神社のいたるところに置かれた竹の枝に吊るすことがで

きる。形アニメや映画のキャラクターから、アスリート、政治家、かわいい動物などまで。ダンサーは通りで浴衣を着る。

3.2 七夕祭り日本、ベトナム、中国の違い

3.2.1 中国で七夕祭り

七夕の始まりは、中国であるとされている。なので、中国の七夕が1番古い行事であると言われているであろう。中国人はこの休日を世界の他の国とは異なって祝いる。花、カード、チョコレートを交換するだけでなく、カップルは非常に特別な儀式も行う。伝統によれば、恋人たちは神の母の神殿に集まって祈っている。彼らは愛と幸福が続くことを祈るようになり、幸せな結婚につながる。恋人がいない人は、愛が来ることを祈るためにここに来る。

中国のバレンタインデーは、女の子の日としても知られている。女の子はしばしばウィーバーガールのように織りのスキルを学びたいと思っている。中国のバレンタインイブには、女の子は通常星空の下で祈ることはない。星のベガが空高くなったとき、彼らは針を水に落とした。針が沈まない場合は、彼氏ができて結婚しようとしていることを示している。彼らは何でも望むことができる。伝統的に、この日は女の子が特にスイカの彫刻で自分のスキルを披露できる日でもある。

現在、中国で七夕と言えば、バレンタインデーの日。これは、中国では乞巧節がすたれてしまった後に、欧米のバレンタインデー文化が入ってきたからだと言われている。日本や欧米各国と同じく、中国でも2月14日はバレンタインデー（中国語では「情人節」）なのですが、七夕は「七夕情人節」と呼ばれ、中国式バレンタインデーの日となっているそうである。中国式バレンタインデーでは、女性からではなく、男性から女性にプレゼントを贈る。

3.2.2 ベトナムで七夕祭り

七夕の日はベトナム文化に長い間存在してきました。この日、多くの人が彦星と織姫のような不運なことに遭遇することを恐れて結婚を控える。代わりに、人々はしばしばお寺に行き、幸運を祈って、愛の道の良いもの、平和、そして好ましい条件を祈っている。七夕の休日はベトナムではあまり有名ではないが、若者の間でとても人気があるべ

トナムの七夕では、小豆を食べる文化がある。そして小豆を食べることで、シングルの人は恋人ができ、カップルは交際が長続きすると言われている。

なぜ旧暦の七夕に小豆を食べるのか？その理由ははっきりとは分かっていない。ベトナムのサイトで調べたところによると、理由は2つ考えうるとのことである。1つ目は、小豆の色（赤色）は幸運を意味すること。2つ目は、小豆は体を温めるので、雨季で体が冷えるこの時期（旧暦7月7日は8月中旬頃にあたり、ベトナムは雨季で雨がよく降る）に合っているということである。日本では七夕の時に短冊を吊るすように、いつの間にかベトナムでは小豆を食べることが七夕の行事となったのかと推測している。


3.2.3 日本で七夕祭り

日本は休日の原点ではないが、タナバタ祭りを支援するための前提である。ユニークで世界中に有名である。七夕まつりは次第に日本で行われるお祭りになった。日本の七夕祭りは7月7日に開催されるだけでなく、地域によって開催方法が異なる。

七夕が近づくと、日本各地で色々なお祭りや行事が行われる。七夕行事の形式は地域によってさまざまで、地域だけに伝わる珍しいお祭りや行事には、北海道の「ローソクもらい」、関東地方の「七夕馬」、長野県松本市の「七夕人形飾り」、島根県大東町の「大東七夕祭」などがある。

また、七夕前に行われるものもあれば、旧暦の七夕にあたる8月に行われるものもある。旧暦に行事を行う主な理由は、季節や気候、信仰的なことがあげられる。以下は日本の一部の地域での七夕祭りを紹介する表である。

表 1 日本で七夕祭りを紹介する

数	祭り名	開催期間	イラスト画像	活動
1	北海道ローソクもらい	7月7日もしくは月遅れの8月7日		夕暮れ時、提灯を手に浴衣を着た子供たちが「ローソクだせよー」と歌いながら、近所の家々を回ってローソクやお菓子をもらい歩く、というハロウィンにも似た習わしである。
2	関東地方七夕馬	8月7日あたり		お盆のほぼ一週間前に行われ、豊作祈願と先祖をむかえる乗り物として馬や牛が作られる。
3	長野県松本市七夕人形飾り	8月7日		8月6日に厄をたくしたおりひめとひこぼしの人形を、風通しの良い軒下につるして飾り、風で厄を吹きはらってもらう厄ばらいを行う。

4	島根県大東町大東七夕祭	8月6日		8月6日の夕方、浴衣やハッピーで着飾った子供たちが、願い事を書いた短冊を笹竹につるし、提灯を手に家々を訪れて七夕のお守り札を配り歩く。
5	宮城県仙台市仙台七夕まつり	8月6日～8日の3日間		七夕飾りの装飾は、和紙と竹を用いた豪華な作りになっており、大勢の観光客が和紙のふれあう音を聞きながら、大きな目玉の1つでもある「くす玉」の下をくぐる。
6	神奈川県平塚市湘南ひらつか七夕祭り	7月7日を挟んだ前後数日間		セレクションで選ばれた湘南ひらつか織り姫が七夕まつり期間中、パレードや市中訪問などさまざまな行事で祭りを一層盛り上げている。
7	愛知県安城市安城七夕まつり	8月の第一週の週末の3日間		大きな竹飾りをひとつひとつ手で作ったり、ステージでの催し物の準備をしたり、1959年には安城七夕まつり協賛会が結成されて今日のまつりのスタイルができあがる。

3.3 コロナ社会に七夕祭りの変化

ご存知のように、毎年夏に七夕まつりが開催され、国内外から多くの観光客が訪れる。しかし、過去2年間、日本の一部の都市での七夕祭りは、コロナウイルスの流行により中止された。誰もがお祭りを楽しみにしているが、コロナウイルスが心配である。日本は全国的な七夕まつりを中止するのではなく、コロナウイルスの蔓延を防ぐための対策を講じている。人々が安心してお祭りに参加できるように、日本のコロナ期間中にお祭りを開催できるようにするためのいくつかの対策を紹介する。

- 飾りの規模を大幅に縮小して開催する。

中心部の商店街に飾られる大型の七夕飾りを、例年の1/4にあたる約80本に縮小する。ただし、周辺部商店街は例年同規模での開催を予定しておく。また、掲出時間については、例年より2時間程度縮小し、10時から20時までである。

- 七夕まつり期間中、イベントは中止する。

勾当台公園市民広場を会場に実施している「おまつり広場」等のイベントは、感染防止対策の観点から中止する。

- 七夕まつり開催期間中、「STOP！コロナ」対策ステーションを商店街2か所に設置する。

七夕まつり開催期間中、仙台市中心部2商店街（クリスロード、ぶらんど～む一番町）に検温ゲートやサーマルカメラなどを配備した「STOP！コロナ」対策ステーションを設置、手指消毒や体温測定ができるブースを用意する。スタッフと警備員は常時滞在、スタッフは定期的にベンチなどの共有部の除菌を行うなど、訪れる方々がより安心して仙台七夕まつりを楽しんでもいただけるよう活動する予定である。

- アーケード内での感染防止のための相互通行（右側通行優先）を推奨する。

七夕まつり期間中、感染予防のため、中心部商店街アーケード内での通行を相互通行（右側通行優先）推奨する。ご来場いただく皆様にはご不便をおかけいたすが、ご了承のほど、お願い申し上げます。

- アーケード内外等での感染防止の注意喚起のためのアナウンスを実施する。

期間中、感染予防のため、中心部商店街アーケード内外等での食べ歩きの禁止やマスク着用、手指消毒、検温の呼びかけのほか、写真撮影等で密集が発生しないよう呼びかけるため、30分に1〜2回程度、商店街のスピーカーを利用し注意喚起のためのアナウンスを実施する。

また、アーケード内が混雑・密集した際にも、注意喚起のためのアナウンスをする。

- 感染防止対策のため、警備員が巡回する。

アナウンスの実施と同様に、中心部アーケード内外等での食べ歩きの禁止や感染症対策の呼びかけを実施するほか、密集が発生しないよう注意喚起のため、プラカードを持った専任警備員を配置する。

- 飾り付けの高さに統一のルールを設定している。

中心部商店街においては、来場者等の多接触による接触感染を防止するため、飾り付けの最短地上高を2メートル以上とし、来場者等の手の届かない方法にて飾り付けを行う（根本付近の七夕飾りを含む）。また、周辺部商店街においては、極力、接触機会による接触感染を防止するため、飾り付けについては七夕飾りの飾り方の工夫や三密にならないよう感染防止のための注意喚起を促す。

- 参加商店街には、店頭販売方法について統一のルールを設けている。

全参加商店街に対し、下記の通り店頭販売方法についてルールを設けておりる。

物販・・・販売可

食料・・・販売不可

飲料・・・蓋やキャップ等がついている飲料のみ可。（ただし、酒類等のアルコール類の販売は禁止）

おわりに

本稿では、日本の七夕祭りが紹介されている。七夕祭り日本まつりは、先住民の文化と外国の文化が融合した色とりどりのお祭りである。日本のお祭り、特に七夕まつりは、喧騒から離れて、つらい日々の悩みや疲れに気付かなくなった。代わりに、フェスティバルの参加者の顔に明らかなのは喜びと興奮である。

日本は経済が安定しており、ベトナムのように戦争で荒廃していないので、日本に行く部署は伝統的なお祭りをこのように整然と保存し、促進することができる。日本の伝統的なお祭りを維持し発展させる方法は、ベトナムは学ぶべき。

つまり、七夕まつりは非常に興味深いトピックであり、勉強する価値がある。このお祭りを通して、私たちは全国で開催される一年で最大の祭りの1つである七夕祭りをよりよく理解するだけでなく、世界観、日本人の人間の生活についても理解することができる。その上、このお祭りは、日本の伝統的なお祭りについての知識を深めるのにも役立つ。日本のお祭りは、日本にしか存在しない特別な文化美である。

参考文献

1. 更新(2017) 『七夕のはなし』

<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp/~kazu/tanabata/tanabata.html>

2. (2014) 『日本三大七夕祭りや国内で行われている七夕の行事を知ろう』

<https://www.kyosei-tairyu.jp/star-festival/event.html>

3. 『七夕の由来と歴史』

<https://micane.jp/events-tanabata>

4. 『日本の七夕行事』

https://www.jishujinja.or.jp/tanabata/tana_ja/